

花供養

底本

月明 848

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

跡不孤必となりあり洛東山なる双林樹下

南無庵の花供養、その徳海内にひろ

ごりて、月の会に光をまし、としごとの春

のいやをひ、あふみかふみのすき人霞む

ゆふべ、鳥が音を啼、あしたをめで、

はた浮立閑語の拍子にもかゝはり、あるは

はこび、あるはふみをして、是がために心を

動かさざらんの輩すくなきはあまねく

古池の遺詠あつきいさをしより起れる

がゆへ、たとむにあまりあり。されや杖は

老をたすけて千里をともし、こたび

金玉の山頭に登り、徐に意空山の

いたゞきにすへ、見ぬ世の昔今を観念し、

はじめに毫をふるふてしかいふものは、能浦

黒島獅子窟の玻井なりけらし

寛政十年三月

一順

朝虹の下もれ出るさくら哉

蜃洲

水ます池に春の漣

闌更

蝶鳥の通ふ染屋の翠簾ふりて

蒼虬

あき手日雇の酒過し声

鹿古

俎板の血しほも氷る雪しまき

松蒼

ひろき城下のはし／＼の留

後楽

後の月鐘鑄あとの土凹く

志諺

希に柳の色替て散

駙丹

住人の砧も持し連顯堂

近き都を牛馬のつて

病がちに草のかぶれの口惜き

已待の灯影咎られたり

夏の来て物古くさき下湯殿

すぼめる傘に麦秋の塵

忍ぶ間の髪も飴らぬ近まさり

手染を侘る七夕の月

橋もれば竹の嵐に竹の露

百尾

馬吹

周泉

寸草

魯長

子鬯

芦涯

秋屋

土卵

鶉の囀に山雀のよる

月峰

作法なく三輪組迄つかはれて

江蓠

明知が陣に荒し山門

芹水

ふる道はをくるゝ花の咲埋み

白黛

桑つむ比の越のさき織

古光

若鯨の籠に香のつく夕間暮

百池

小雨に見やる伊勢の柴垣

鬼荊

薄衣糺の神の代参り

黒樹

疼をさへてけさも起ぬる

破巾

すたれたる伯父の長者の名の惜き

其成

釜の湯気吹年越の風

得終

紅粉さして爪の匂へる比なれや

南栄

老母草のかれ葉恋ほどけかし

応美

亡人の像にちよろ／＼紙魚の出て

乙道

みんながよしとすゝむ葛切

掉雪

末略

花咲や吉野あたりの駕かせぎ

上毛藤岡 曲枕

寝まよふと鳴夜烏や花の山

、 琴松

山口に鎖おろしけりゆふ桜

洛 凡二

山ざくら我よぶ人の覚束な

、 甫雪

さくら／＼雲にも登る身は軽し

、 壺山

散さくら眠り上戸の閑なり

、 車莫

あしもとの暮るもしらず花見哉

芸州小方 可友

名月や明ればたゞの露の朝

江州長浜 翅月

道つくる翁ひとりやはつ桜

筑後伯東寺

可承

名月や空一色に静なる

全

心すみて詩意うかみけり竹の月

上毛大原

青蒲

月影や魚のひれふる水の色

、

翹舟

宿かりて心一ばいの月見哉

遠州桂松

和吹

散もせで人をいとふか花曇

浪花

画涼

花高し築地を越る蝶の群

西湖太田

二鶴

雲井に霞む舞鶴の声

知石

笠ふたつ親子連立うらゝかに

有隣

鄙風俗もなく敬はれぬる

羅交

里の秋月さやかなる宵なれや

如柳

ひらたき家にしころ打音

隣

らうたげに平氏の末のうそ寒

交

涌出る水の代々に流るゝ

鶴

此国の鬼門を守霊地哉

石

さき織着つゝ宿を求る

柳

一しきり雪にまぶれて鳴衛

鶴

三上はなれて月は冴たり

神垣に忍ぶ祈の嚏して

人のおもひにぬらす被や

後朝の歌に眠れるやない筥

笥の手水清く来にけり

しめし野へよるべの産の初桜

酔てよろめく陽炎の中

花の山奥は恐ろし後鬼前鬼

石

柳

交

隣

石

交

柳

有隣

花を出て鳶の身ふるふ枯木哉

二鶴

登り／＼落る日も見し花の山

知石

永き日に詠めあましつつ花の山

一路

遊びたらぬ日とは欲也花の山

羅交

散花や釣灯籠の夕気色

如柳

長柄さす人を拝むや花の山

雲州松江

文龍

我かたへ花皆向けりあらし山

在大坂

眠山

桜木に歌書人ぞおこがまし

闌亭

死生不断知とも迷ふ花見哉

伊丹

老橘井

甘ぐさき水の匂ひや雨の花

但馬

蘭山

おしむ日や心もあらじちる桜

伊賀上野

柏舟

花の井と名付たらなん水鏡

対州

孚鋏

散そめて我身なりけり桜守

以三

四方の花あら／＼見たる夢売ん

寄三

神主も桜折まで酔にけり

寄哉

風のなき里の低さよ遅桜

蘭二

花とびて世は驚かぬ心哉

由梅

遠近の鐘聞ゆなり夜の花

但馬船谷

五雁

夕栄やをしてるうらの初桜

全

花の雪日傘に音もなかりけり

信州飯田 柳枝

夕ざくらひとり残りし人のあき

武州熊谷 月樵

花の山奥ふかき事何千里

豆州伊浜 眠石

盪風花漕わけて小船かな

湖東日野 松羅

明六ツを女のさはぐさくら哉

芸州広島 梅仏

花の陰無言の人に興多し

文由

かゝる世に生れて安き花見哉

遠州植松 和吹

見て帰る桜またおもふ月夜哉

下野栃木 尺樹

遠浅や花迄船のひとりつく

加賀

卜舟

明日の花に髪結さはぐ女かな

但州村岡

晴島

友の来てけふも桜に暮にけり

伊勢四日市

路圭

折かけて見て気のついた桜哉

、内堀

市文

ゑびすらがしらぬ遊や桜狩

、高角

斜柳

存命でうき世の花に狂ひけり

、曾井

化蝶

尋来て詠めにあかぬ初ざくら

、寺方

一茎

手を打て唯あきれけり花の山

、

雨夕

暮る共しらで深山のさくら哉

、

弧溪

鶯の帰る山路や遅ざくら

、

里朝

雨の花人落あひぬ知恩院

加賀

兔文

思ひたりぬ月のをり咲山ざくら

出羽古沢

露橘

花ざかり顔よき狂女猶あはれ

、

素風

白瀧や花より出て花に落

夢庵

都人は何おもはるゝ花の雨

上州相生町

吐雲

朝の間のさくらの上や雲起る

越中高丘

壺仙

世の中や咲て桜のしのばしく

全

やがて咲山うすあかき桜かな

江州堅田

子得

花の家を尋れば実さかり哉

加賀

觀然

袖かさや恋しき雨の桜人

伊勢内宮

右竹

溪寺や桜一木に人だまり

西江州高島

南嶺

世にふるも実よ伽藍の花桜

上毛大原

白斗

灯のうつるや社地の夕桜

、

麴舟

花咲て花一筋の心かな

、

青蒲

咲花の魚食ふ人のなくも哉

雲水

田禾

花の陰李白が白髪忘れけり

浪花

蕉里

夕山は捨紙多きさくら哉

能登黒島

柳汀

霞みの帰る袖の色草

珠卜

八重垣や琵琶に鶯鳴声洩て

玻井

げじ尼狂ふ濡土の上

素玉

起直る篠にかけ置居待月

文朝

むくにはとめる庵求けり

梨邑

空也寺の鐘のひゞきの肌寒

朝山

通ひ車の雨に中絶

嵐枝

鴛鴦つがひうき世の恋はまゝならず

埜東

岸の紅葉の夜半に散ける

布遊

荒人の神も興ある宮造り

麦秀

鼓を振て古語を唱へる

為本

夏空の月に五升の酒吹て

文珍

関の清水に小嵐のたつ

馬涼

馬士があはれに瘦る物とがめ

加由

餓鬼やどる木の椎も芽を張

卓母

雲埋む花の麓の花の坊

玉史

あそび尽して陽炎に寝

汀

片隅に烏帽子をぬげば女也

須磨を落行船の暁

鶉鳴松風の音ふきやみて

蛎雑炊のしたはしき比

手雫の貫簀に凍る寒の入

傘並ぶ温公の家

盃に百日紅の花こぼれ

岩そふ水に赤蟹の這

泣／＼も別れの袂引とゞめ

涼 東 枝 秀 邑 朝 玉 井 卜

十日ばかりの御所下の恋

穂芒の露にまばゆき宵の月

狐世を経て秋深き声

山椒ほす冬を隣の妙義院

灸に瘡をおとす沓持

我守星は消ざる北のかた

簾かこひ寒き軒の梅がゝ

名にそよぐ真葛原の花の鞠

蝶と鳥との行ちがふさま

山 遊 本 珍 由 母 史 卜 筆

人媚て月にも奢る桜かな

能登黒島

玻井

巡り来て春告草や花供養

素玉

両峰の桜移ふ堤かな

為本

いく曲り大河も見たり花の山

巴陵

山風のこゝろはなきやはつ桜

加由

もどかしや匂ひの遠き舟の花

都山

山ざくらかゝる処に住居哉

馬涼

遠山や霞の中の花の瀧

蛙水

散花を惜むは浮世心哉

埜東

生鯛の嗟峨にゆかしき桜哉

柳汀

よひ闇の間を眠るさくら哉

文珍

ゆふかげの花にも忍ぶ袖香炉

布遊

日最中やしぐれ桜の雫せり

嵐枝

灯火をしたふ鳥有夜の花

犁邑

海山の便も遠きさくら哉

文朝

何鳥や巢をくふ花の枝高し

麦秀

狩／＼て田舎へ出たる桜かな

珠卜

我が見ると思ふは花に罪深し

同浦上 卓母

咲初て葉に埋みけり犬桜

錦川 玉史

水清き花に遊べば塩遠し

道下 端周

端住や先初花の便よき

越丸岡 振々

麦葦の匂ひ通す柴籠

甫立

蝶鳥に飴売の笛吹立て

晨風

ならべて置し瓦かはける

虎洞

月の頃すみて流るゝ小石川

里晴

こぼれそめけり露の白萩

飛声

新酒に旅のつかれや直すらん

龍至

童たのみて捨る灰吹

振

入梅曇引乱したる舟の綱

晴

かひなく水鶏たゝく須磨寺

声

越かたのあはれ恋歌の朽やらで

立

おもひひたぶる妾がいたつき

風

すがく／＼と竹の林に月冴ぬ

至

霜ふる宿に屠る獺

ひとり身の人形造り店借りて

此ほど春の心地こそすれ

広前の夕日に栄し糸桜

佃にそよぐ苗代の風

四方は花鶏の音長う鳴暮す

世の中やあら事／＼し桜狩

遠里の花にこたゆるこだま哉

声

振

立

晴

風

晨風

飛声

振々

山賤の薪重からむ花雪吹

一革

薄曇かきあげ城の桜哉

里晴

朝の月傍白し花のやま

慶柳

心ちらぬ一木ぞ庵の遅桜

洞々

経の声すみ渡りけり山桜

酣子

花守にけふも来て顔みられけり

祖龍

心地よく花咲揃ふ弥生哉

少年

虎洞

重荷せし牛も出て来る山桜

路江

下馬先に乞食荷作る遅桜

枳友

夕日さしてもるゝ深山の桜哉

東輪

魚飛て足もと狂ふ糸桜

雨声

帰るさは見馴る連や花の暮

友甫

雪の後ふたゝび白し山桜

鷺白

花の世や月さし残る山かづら

龍玉

深山から都貰ふてはつ桜

有龍

市人の袴をきたる花見哉

思童

夕暮や花は朝から静なり

甫立

雨晴て花の山とぞ成にけり

雲州蕉雨

棧もあれや桜の雲つゞき

日向美ゝ津

吟龍

うき夜の曙ざくら咲にけり

信州林

里風

角たゝぬ山路なりけり桜狩

風子

花に出て花に入日やよしの山

浪花

尺艾

咲花にするどき樹／＼は隠れけり

洛

志諺

青松葉負人いかにはつ桜

伊勢津

烏翠

夕日もさらず田螺なく宿

田禾

南べりの小吹になれば春過て

子良

あそぶ工夫のいつも世話敷

有明の鬼灯はみな籟破り

鳥のふみ消す沙の白露

末枯の鳴戸の船にけぶり立

鉄漿をつけたる僧のさぶらふ

何ひとつ箸にかゝらぬ膳まはり

凌霄咲し朝のつれなき

むら雨の物いふやうに降かゝり

兀たる面をおれに着せるか

翠

禾

良

翠

禾

良

翠

禾

良

打ほかす角力のあとの魚の骨

霧のあちらは鏡鉢のなる

ちら／＼と柱に隠す三日の月

たばこすふ間に馬の子を産

松の尾の花よ神輿を轟かす

皆かげろふの顔と成けり

、

閑なる日を降にけり花の雪

汲汐に磯山ざくら散やちれ

翠

禾

良

翠

禾

良

洛 路月

浪花 荷的

咲花にもの拾んと思ひけり

丹波梶原 洞々

夜桜にすぐれて人の寝よき哉

、牛河内 東畦

児をよぶ声こだまして花の奥

、成松 琴牙

昨日けふてるや桜の飛鳥川

、柏原 月壺

暮る迄日のてる山やはつ桜

越後塩沢 牧之

山ざとや花の奥なる水車

、目来田 里竹

夕桜きのふもけふも照ばこそ

池田 瓜坊

曙のさくら散日と成にけり

城南 五牛

夕山にたまれば花の匂ひ哉

、 無兆

散花を来てなく鳥の心哉

加州本吉 壺石

こゝまでは鮎ものぼるよ遅ざくら

洛 芹水

水浴し鳥すぐに来ぬけふの花

伊賀上野 蛙方

よぢ登りのぼる甲斐有山桜

伊勢津 理玉

心うごく隅田の縄手や花の暮

上毛矢川 如雲

望月にちりもはじめぬ桜哉

、本宿 龍山

とてもならあの山越ん花盛

浪花 几仙

千々の桜皆我物と思ふかな

肥前諫早 榎江

うかれ／＼つい有明の桜哉

、 夏蓼

一日の友を名残や花の暮

霞紅

人とへば桜咲門と教けり

青呂

花幾日つもる碁磐の埃哉

梅枝

雲去てげに遠山の桜哉

春葱

蕾より三たびさくらの風情哉

澧波

さかり場の桜の下や鉦たつき

上毛三倉

里水

みち汐や磯山ざくら影うつす

如樂

花咲て世の春を知庵かな

古武

朝まだき身ぶるふ鳥や花雫

寛雨

木戸先や暮行花に田螺鳴

ヒゴ山鹿

涼瓜

うかひして花吐谷の流かな

柳多

夢なれや花にうかれし花心

竹閑

暁の雲消残るさくら哉

弧秀

山ひとつ暮残たる桜かな

、チクタ

一翠

谷／＼や風をはづれて花残る

、熊本

鳥酔

野の花や二人は狭き石の上

尺莆

出船や入江を去て峰の花

李夕

温泉あがりや眠催す昼の花

箕溪

我が植て幾年見つる桜哉

肥前嶋原 雪女

日ざかりや雲静りて花の上

芦笛

騎捨て花に更るやひまの駒

兎月

曙とさくらが中の鳥かな

吐龍

月落て灯つきぬ花の下

利貞

花の麓日たゞ酒売をみな哉

蘭谷

、

朝隈の花を過行外山哉

桃仙

雉子もそゞろに聳ものしつ

、

友どちと炉ふさぐ上に酒酌て

門に仕丁が嘶あらくれ

月代の砂に手習ふ曲形リ

あそび絶せし事のうそ寒

花にくれてそゞろ柴焚男哉

霞晴て下道にまよへる

乙鳥は心尽しの鳥ならん

末略

、 、 、 、

万夫

桃山

闌更

いざ我も一烈せばや花の陰

肥前嶋原 万果

枝かはす桧の中や山ざくら

、 万夫

やよ花に水茎染ん山かづら

桃仙

花の雲中に仏の爪はじき

イセ津 冬地山

あふげばいよ／＼高き陽炎

万井

大釜をいくつも鑄たる春なれや

五六

鳥の落毛の顔にこぼれて

瓢亭

味噌買し宿の月待うすぐらき

子良

ことし瓢に尺あてゝ見る

麻衣木曾路にかゝる秋の風

卵累て我を泣かな

美しき髪ふりほどき／＼

残らず伸し合歡の朝かげ

若駒に一鞭くれて飛す也

あこが年賀に城ゆすりつゝ

炭砕く埃まぶれの宵の月

鰐口ばかり寒き音もなし

山 井 六 亭 良 山 井 六 亭

鶴の鳴沢辺／＼に駕をやり

真白き髭の歌を苦しむ

桜の木五本からげて貢けり

随分米の旨き如月

蟬とりの戻りは雨のぼろつきて

くゞれぬほどの花表立たり

古郷や松物いはず味きなき

やつれ給ひし少将の君

硫黄木のほど匂ひける冬の夜に

良 山 井 六 亭 良 山 井 六

門水に来る鈴鷓の声

淋しさのあんまり近き伏見山

田禾

灸の皮をめくりかけては

山

刀さす妾が弟の名を受けて

井

うつけ心に萩を吹風

六

灰汁桶の灰汁の翻るゝ暮の月

亭

案山子つくれと人の進む

禾

ひとつ宛法華書つき石撰か

山

兜埋し草の短き

井

船橋はつんぶり靄のかゝる也

田楽くさき春のあけぼの

拝れし姿拝むと花咲て

みなあたゝかに今時の水

かはらけや花の上越す桜狩

花をふむ日はあぢきなき霞哉

さくら咲や船は明石の朝朗

ちら／＼と星の田毎に風の花

六

亭

禾

筆

仙台

五渡

福二

柴船

東流

寄藻吹風腥し花の雲

江州八幡 紫石

袖硯拾ふ野道や朝ざくら

、 芳志

桜みん今は嵐の世の中に

豊前小倉 桃子

分入れば花に奥なし鐘の声

五雲

かゝげても桜に細し石灯籠

敬之

花の下にけふも現ぞ草枕

完固

浪白／＼遠き渚や花曇

花水

老らくの何を申や花の下

器水

松が浦いつを花見る春にあふ

讚州笠居 芝峰

心にくし興ある花に茶の匂ひ

但馬夏梅 沙月

夢なれば又見る山の桜かな

、少年 有方

藪越て桜見えけり長が家

、桂月

夜ざくらや橋なき筋に恋渡る

生野 涼秀

一里ほど行ば日暮ぬ花の山

夏梅少年 水式

折枝や鳥もくはへて花供養

、湖月

夜桜や我より奥に人の声

江州太田 瑳雀

松の中や竹の奥より咲桜

備後三原 何笠

雲沈み花浮とみへて雨過ぬ

、土芝

塵塚のちりの上なる桜哉

南方蒼椿更

厲揭

花の陰盃とれば月やもる

、

節雨

花見連道くさに吹嵐かな

芸州能美

東明

花供養我は露のみ心のみ

房州此君更

樗石

如意を尋る朧夜の月

楚流

雁がねのしきりに春の音を鳴て

、

青みし米の糖埃る也

石

薄雪に西国便うち設け

、

尺にあまれる竹の伐口

児達の中にちさきはかしこくて

還御の声のうつる夕暮

狩衣の恋風つたふ垣間見に

わらは病なるほとゝぎす哉

はる／＼と世の冷を訪らへば

落行水に仮の板橋

菊の頃なまなか月の影細く

ひさごの酒を神酒に捧る

流、石、流、石、流、石、流、

小あきなひすれば西山東山

蝶は身軽に日を安う経る

咲よりもちるは桜の風情にて

琴柱に通ふ春風もなし

、

鳶飛て桜に曇る麓哉

散花や魚のかばねに夕鴉

花なれや／＼蝶の三千里

住なれし庵にもどりて初桜

流

石

流

、

楚流

鳥因

播州小野
君中

越後
如蘭

散しまふ雲井桜や雲の末

芸州能美島

雨丹

花七日世を下陰の庵もがな

武州青梅下

嘯谷

朧夜のしらけて浅黄桜哉

但州芝村

尚古

山守を酒にめさるゝ花見哉

全

門高月夜桜のうつりかな

、 僧

如月

憂恋の姿もあらめ雨の花

、 龍堆

夜桜を動す峰の嵐かな

、 麦秀

山ざくら月は朧を増にける

浪花 竹箠

山の井に影うつる時夕ざくら

、 華洲

かたくなに留守守花の女哉

卜能登巴 麦杜

花の山十歩に転ぶ鼓かな

浪花 広布

初花やふとんのうすき初瀬宿

、 鯉千

花見にといふ日に成ぬ庭の花

、 瑞馬

負ひし子は背に眠りて桜散

伊州上野 可慶

蜂の巢やあたら桜に人もなし

但州舟谷 五雁

花ちるやさとりし人の後かげ

加賀宮腰 故園

花や見ん四五日食の米はあり

武秩父 日和良

しるしらずむさんこに寄花の門

洗耳

花に夜もねられぬ宵の曇哉

武秩父 楚雲

夕山や桜にのぼるうす煙り

如圭

散花の下や放下のい(濁ママ)ぼ 太鼓

亀白

香は誘へ花なちらしそ夕嵐

周貯

ちる花に紛れて鳥は帰けり

浪花 たか女

片枝は瀧つらぬいて山ざくら

江戸 風化

花の陰稚きさまの翁あり

浪花 詩船

花に酔て産れしまゝの心哉

蘓雄

何某の鳥一声や遅ざくら

玉翠

世にあはぬ翁来ませり遅桜

肥前神氏

春喬

山川やさくらちる日は水薫る

仙鳥

ある僧の無言破るやちる桜

兎丈

分入ば心うごくや山ざくら

齋我

山守や二日酔する花最中

芳洲

桜盛里の名立るあるじ哉

魯盞

あたらしき道は橋有山桜

皋鶴

又こよひ寝に来る鳥や森の花

梨水

夜／＼は夢に通ふぞ花の山

呉秀

時として頭たれけり旅の花

完雅

花の陰水もよどむか芳野川

、島原

夢応

いたづらの詠やさしき海士が花

芳水

うつり香に蝶も迷ふか花の袖

一睡

長生の欲も起るやはなの時

几睡

散花にましら子を呼雨夜哉

、伊祿

万戸

恋外にむかしは何をさくら花

江州彦根

飛川

見残しもあるらん花の嵐山

洛

関叟

二里下でもとの桜に休みけり

伊勢神戸

東流

夕桜人静まらば物いはん

羽雪

酔臥てとぼける花の雨夜哉

玉垣

孔阜

門うつは月か桜かよるの人

、山田

晴山

鹿ひとつ追るゝ花の嵐哉

仙台

弾子

真夜半や花の木の間の魂結び

伊勢津

蘿送

ちる桜匂ひは空に帰けり

筑前甘木

布館

たぐひなく花光けり桜町

江州水口

一更

夕風や人にしられでちる桜

かう女

雉子の声聞迄行やさくら狩

越高丘

楚古

築山や桜見へ越す舞扇

能登七尾

暮臘

木に昇る蟻より遅し散桜

、

其之

灯もたてぬ戸に人声や散桜

未来

どの顔もしらで気随に桜守

烏工

関越てあちらははやく桜哉

許風

たそがれや花に思ひの結び髪

一方

乗物に人なき花の禁哉

眉尺

道あれば霞隠れの桜かな

菊人

山霞む花間／＼の藁や哉

可仕

美しきかなかく花の主哉

三夕

雨一夜千里花咲あした哉

何芳

見えそめて一里つまづく山桜

百尔

、

黄昏の狐たちけり山ざくら

能登七尾

其之

草に寝覚る春の柚人

暮臘

焼若和布もとの塩気にしなやぎて

未来

茶巾ひとつになら布を切

何芳

ひめ杉の風こまやかに月の影

百尔

鳥まつ池の水落しかへ

許風

ふりあげる手斧の先の赤蜻蛉

御齋の酔にはづす肩衣

昼の蚊屋床しう見せて開放し

長崎女奇・楠を盗み売

薄じめり小砂の上の下駄の跡

神輿を渡す舟の鬮引

月の床蓋なき物に酒入て

うつゝ夜浅き関の山風

むねあはぬ秋の衣にしこみ紐

もろきながらにふきやまぬ銭

井のもとにそゞげる花の降こぼれ

蒔種つけし坊主馬ひく

、

雨そへて桜かつちる禁かな 信木曾ナラ井 李蹊

雨晴て桜に競ふ人ごゝろ 加賀金沢 槐路

けふよりや春しるさとの初桜 備中笠岡 文里

吹よせし貝散花の入江哉 備后甲山 如耕

心そゞろそゞろに花の散日哉

備後田房

古声

中／＼に見しこそうければつ桜

遠州

演之

花の山斯いふ姿と申けり

イセ山田

石人

人の春さくらの外はなかりけり

、

桃家

おもしろき世の宝なれ花に月

、

鶯溝

朝雨や花見にゆかば簑かさん

備前島原

白夢

母負て山寺の花見にゆかん

白花

ついまつの墨して詩書桜哉

白石

ちると見て今やめで度花曇

浪花

嵐山

花に入て人なき野辺の真昼哉

イセ白子

無曲

けふこそな花に埋ん古仏

洛

都雀

花幾日此日にせまる匂ひ哉

甫尺

あの鐘の上野に似たり花の雲

雲水

一茶

古寺や箔代なげる花の中

桃里

世は花になりぬる風が行ゑ哉

土卵

竹の闇花の月夜のはせを堂

駒丹

夕暮やちらかる花のしづ心

江蓼

見ならはぬ心に侘し雨のはな

羅月

花供養雲沈らんひがし山

丹後宮津

百尾

捧たきけふを桜の最中哉

、

馬吹

小衣で花見る人の果報哉

洛

兔夕

曙の花貴也けり十二日

杜桂

見るまゝに静けき花の光り哉

棹雪

しるよしの人もなりぬ花七日

百池

花供養真葛が原の風もなし

播姫路

周泉

花盛世は何事もさはりなし

、

寸草

咲ぬ木も咲木も花の夕かな

城南 魯長

浪の上も静に遠き桜哉

子鬯

物あてな実生の桜荅たり

ノト 破巾

散花や烏帽子の人の袖かづき

洛 白黛

庭にある物梅よりぞ花供養

其成

行末の夕山ざくら家を蒸

後樂

花にうき世住捨しとぞなつかしき

イセ 秋屋

昼の埃しづまる月の桜哉

洛 芦涯

あたゝけき迄もつもれ花の雪

河内 古光

山寺の仏尊きさくら哉

芦風

あはれにも老木の桜咲事よ

如水

おもはずも禁酒破りし桜哉

五峰

使者付て何処へ贈る桜かな

谷水

つまづきし石に咎なし桜狩

如竹

雲と咲雪と踏るゝ桜かな

、私市

由之

心よや花見戻りの星月夜

卜子

花散しあとに茶店の柱穴

歌連

おもひきや夜の花見の五六人

鯉山

ひとり来て独帰るや山ざくら

西湖カモ

堅山

風の音花によすがの片ごころ

、栃木

北嶺

あさ／＼と吹ひらかすや朝の花

雲水

五六

鳥追て鷹の入けりゆふ桜

加賀金沢

夢庵

谷川や魚の下なる花の影

巴州

世をいとふ人の清けり花の雨

周馬

散し上を猶ふく花の嵐哉

眠和

山買へばさくらの主と成にけり

車大

朧とはしげ／＼時か花曇り

能登出土津

魯邦

ちる花や二日酔してけふも行

筑前木屋瀬

木耳

くらべこし八十年よ花ははな

相州猿ヶ島

丈水

花盛月にも一夜寝それけり

起由

遅ざくら只一すぢの詠かな

松調

花にのむ酒や日の影月の影

、三浦

呉雪

山桜野越に麦の畠かな

及古

花になんひかれて山に山に山

、宝田

巴橋

花にこそよけれ青野の草畑

、茅が崎

暁太

年／＼の桜にふかき思ひ哉

肥前諫早

孤石

入相や寺の花見る人床し

輝白

雷に雲井の桜散んとす

雨夕

花に欲起りてけふも日の暮る

梅路

山高し桜の夜明鳥の声

文塘

深山辺や花重りて雲に入

イヨ今治

卷玉

百敷や夜すら花守棒の音

車南

散なしていはほも花の白衣哉

素明

其曇り静や花の山かづら

挹波

花のかゝ浅茅が宿の五位の声

上毛厩橋

軽鳧

黒染の袖へも散し桜かな

晶角

日の入て漸花に別けり

、関

米倉

入相やさくらに深き人の声

、桐生

李陰

青空へ移ふ浅黄桜かな

、□口

米度

濡顔の雪と見ゆらん朝桜

、桐生

静山

月晴ていよ／＼白し花の庭

得牛

さくら咲山静まらず人の声

厩橋

宗応

花咲て世を面白う暮しけり

香風

あたらしき硯に嵯峨の花見哉

麦四

冷水に金かへけり山ざくら

米砂

永き日も桜に暮る夕かな

歌江

思ひつゝ来ればちる日の山桜

豊前小倉

南明

花見する人に問けり物の味

夏夕

雲吹や遠山ざくら今いかに

ノト七尾

翠洞

花みんと小船に棹をさす日哉

、金丸

雪仏庵

南気や花ちる池の魚の溪

在京

吐月

朝霞桜にもるゝ鉦鼓かな

、福浦

素石

日の影や風なき山の花曇

雲浪

動きけり桜にしらむ明の星

ノト

既文

咲たりと思へば雨のさくら哉

上毛厩橋

李雪

何といふ山か桜の花ざかり

、樋越

素栄

不断咲さくらはも春ぞ桜なる

、田口

李元

まだ人の足跡はなしはつ桜

込替戸

枝雪

みよしのや花の見所咲所

訴岱

ちる花の中を往来のしらぬ人

サヌキ仁尾

宗跡

花なかばそゞろになりぬ人心

杏唐

捨かぬる世や初花の草鞋くひ

備后福山

李朝

山路暮て花は朧の朧かな

イセ山田

平虚

山本や花にかけたる囚籠

ヒゼン神代

画鮮

立人にはや散初るさくら哉

、諫早

都異

聞濟せ花の梢の鸞の琴

越中放生津

二翼

初桜覚束なしと思ひしに

、

白老

小座敷に傾城捨て山ざくら

紀熊渡州松島

我青

夜をこめて北山桜さきにけり

信州飯田

何頼

瓶の桜雨の降日は客もあり

、

きく丸

後より月は出にけり山ざくら

イセ相可

闌鴉

母負てけふも暮しつ花山

、
黄山

花の窓半身の美人みゆる也

、
楚雀

塗樽の赤くぬれて花の雨

、
柏梁

花ざかり火入の炭の曇けり

、
貞律

平山に人あまる花の咲にけり

、
闌更

雲をはなる蝶に驚く

、
闌島

春の窓酒の香もなき瓶すえて

、
黄山

小ぐらき方は土しめるなり

、
貞律

月の夜をうかれ出れば鹿の鳴

楚雀

人とめる家の秋は広／＼

柏梁

咲つゝも幕のうち也山ざくら

肥前佐賀 清明

花ざかり寺は七つを限り哉

江州水口 斗酔

花供養桜にあらず花にあらず

イセ津 梅二

詞書略

鬼貫があるかぬ旅を春の花

万井

路通は老て芳しき草

牛一

陽炎の朝たつ門に橋もなし

蒼虬

ならんで鳩の皆静なり

田禾

月の名によべる一木は伐残す

鹿古

霧もる膳をすゆる比ほひ

芦涯

、

花鳥の色音に交る胡蝶哉

尾張熱田

烏玉

霞に植し袖すりの松

雄里

小太郎がとしは三五の春立て

万井

畚あたらしく稼初けり

牛一

月かけて丸木の橋や渡るらん

貞保

星のはこびも遅き秋の夜

よしめ

斯ばかり鹿居る山に酒はなく

一蝶

しのばせ給ふ何某の君

巴之

、

ちら／＼と目癖はなれぬ桜哉

甲州浅原 真洞

我ものとおもふ桜の暮にけり

、 六珈

夕闇の桜をさらぬ諷ひ哉

飯野 真都良

何某の寺とたづねて花見哉

静良

酒もねだり花もねだりて手折けり

梅五

糸竹のやゝひるみけり夕ざくら

山之神

鳥語

出歩行ば兎角花見の人に逢

陌洞

朝雨や匂ひ吹そふ遅ざくら

紫蘿

花に来て同じ心を隔てけり

可申

来しかたも見渡す方も桜哉

布施

夫雪

日の闌て花にふはつくはだへ哉

山寺

和石

花守の余所出をかしき月夜哉

平岡

孔阜

山鳥のねぐらや花のうら表

龍笛

めでたげに一重は散て八重桜

加水

仇ならぬ桜がもとの煙り哉

如雪

宵闇や寝せで散花あらまほし

百々
令雨

花守と呼れぬ寺の男哉

府中
杜与木

朝食のむかひうけたり花の本

いはつみ

花咲て人にうたがひなかりけり

ふたけ

糸ざくら二度来て盛定けり

藤田
漢甫

山寺や花の外には花もなし

鏡平

人とめる有明桜咲にけり

蟹守

久敷わづらひて少し

おこたりける頃

咲日より膝もとにたつ桜哉

可都里

世はすでに八重桜さへ散にけり

下毛栃木

尺樹

二日目は花見のもどり暮にけり

灯居

雨はれて思はるゝかな桜山

桃葉

あら小田や桜浮つき水もなし

ゝ間中

百尺

片隅や見る人静花しづか

津軽

里圭

走田川花の流るゝ時し哉

浪花

青鯉

夜ざくらや今灯火も風の前

一炊庵

ほの／＼と夜は明にけり花の下

赤間関

鶴翁

琴の音色花のふぶきに狂らし

指月

夜の桜腸にしむ雫かな

喜慶

朝夕の露からぬかも花の雲

里翹

花の山鳴過にけり暮の鳥

佳馨

花の山音せぬ風も覚けり

和由

茶煙の末や桜のひと曇

松花

待侘たる継穂の桜咲にけり

蟻好

けふ見ずば人の科ある桜かな

洛

如風

露降る片山ざくら長閑也

玉屑

あすありといふ人花に憎れむ

五芳

露もてる風情を花の誠哉

丹後河守

梅居

散花をかづきて魚の浮江哉

、宮津

魯杏

世につれて花見る京の乞食哉

五楳

宿直してあかず有明桜哉

魏道

散花に静成けり人のさま

高田

几丈

低ければ低見る岡の桜哉

カゞ

凸山

松柏や花の梢に朝の風

カヅ

李下

あかず見る花は我身の癖成か

玉枝

上もなき花とはなりぬ遅桜

鹿古

うつほ木の土や幾代の花の塵

蒼虬

追加

柚が家の小づかひ銭や花一枝

赤間関

仙露

引汐の漣となるさくら哉

仙梨

花咲て寝所もなき心哉

花休

山幾重花の嵐の移り哉

豊後

蘭子

桜咲てあぶなき道を通けり

里晴

花の色にうつろふ人の心かな

壱岐 鯉星

真先に瘦た男やさくら狩

湖帆

朝戸出て散花寒くみへにけり

其冠

かゝる世に生れて安き花見哉

遠州 和吹

芭蕉堂蔵板

(なし・39)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)